7　注2と同書「てる」の項
8　注3と同じ
9　「紫草のにほへる妹」（1二一）「山吹のにほへる妹」（11二七八六）「つつじ花にほへる君」（3四四三）「つつじ花にほえをとめ」（13三三〇五・九）など
10　この作については、久松潜一「上古の歌人」二八一～二頁五味智英「古代和歌」一六三頁、小島憲之「上代日本文学と中国文学」（中）九四六頁、川口常孝「万葉作家の世界」三一三～四頁、五味智英「岩波講座日本文学史」赤人と家持、中西進「くれなゐ―家持の幻覚―」（文学　35巻6号）などの先覚によって種々の解釈がとられている
なお、「にほふ」については、北住敏夫「『万葉集』における『にほひ』の美」（「万葉の諸相」所収）武智雅一「万葉集の『にほふ』について」（愛媛国文研究　6巻　昭和32・3）柴生田稔「『かをる』と『にほふ』」（国語と国文学　36巻3号　昭和34・3）などの御論攷がある（古代関係のみ）

万葉集巻十一・十二の原形についての一考察

―家持をめぐる女性たちの歌から―

江野沢淑子

序論

万葉集の撰者については、平治年間、藤原清輔がその著『袋草紙』の中で、大伴家持が孝謙天皇のころ、撰したと述べて以来、中古には常陸の僧、仙覚が大伴家持と橘諸兄の両人撰をとっている。また、近世になると、契沖は巻一七から巻二〇までを考証して家持私撰説を主張した。その後、本居宣長も『万葉集全部巻之考』の中で、大伴家持の二度の撰を主張した。なお昭和三三年物故された武田祐吉氏は『上代国文の研究』の中で、用字法上から、万葉集は家持の撰でないことを述べておられるが、よく読むと、万葉集が、家持だけによって撰ばれたのでなく、家持以後にも他の人の手が入っていることを主張しておられるのである。

以上のような点から、現在においても、家持が万葉集撰定に非常に関係があることにいえるようだ。じつは大伴家持をめぐる女性たちの歌をいじっている時、ある事実にぶつかったので、それについて言及してみたいと思う。

一、大伴家持をめぐる女性の歌

大伴家持と歌を贈答した女性をあげてみると、まず正妻の大伴坂上大嬢、その母であり、家持の叔母にあたる大伴家持坂上郎女。あとは、恋愛関係にあったと見られる山口女王、紀女郎、平群氏女郎、大神女郎、中臣女郎、安倍女郎、笠女郎、河内百枝娘子、巫部麻蘇娘子、栗田女郎子、日置長枝娘子、その他に娘子、尼とあるものもある。

右のうち、山口女王の伝記は明らかではないが、皇族出身の人であろうし、万葉集記載の歌六首は「山口女王、大伴宿弥家持に贈れる歌」の詞書により、全部家持に贈られたことが判る。これに対して、家持からは一首も返歌もない。恐らく、若い日の家持をめぐる女性の一人であろう。

秋萩の置きたる露の風吹きて落つる涙は留めかねつも（巻八・一六一七）

などは六首中の佳作といえるが、「秋萩に置きたる露の風吹きて」の序詞が実に美しい。そして、歌の内容は家持への片思いの歌で、しんみりとして心にふれるものがある。

紀女郎は、紀鹿人の女で、名を小鹿といい、安貴王の妻であったらしい。大伴家持に贈った歌は五首ある。とくに、

戯奴（わけ）がため吾手もすまに春の野に抜ける芽花ぞ食して肥えませ（巻八・一四六〇）

は、たわむれて「戯奴」といい、痩せていた（？）家持に「食して肥えませ」というあたり、才智にたけた、純情ならぬ紀女郎の一面が伺われる。続いて「昼は咲き夜は恋ひ宿る合歓木の花君のみ見めや戯奴さへに見よ」（巻八・一四六一）は恋に多忙な家持を皮肉って詠んだ歌で、多分にいやみも感ぜられる歌である。

また、平群氏女郎の歌は巻十七に、十二首記載されているが、その歌群の末尾に、「右件の十二首の歌は、時時に便に寄せて来贈れり、一度に送りし所にあらざるなり」とあり、時々に贈ってきたものを家持がまとめておいたらしい。その歌の内容は、「焼く塩の辛き恋をも吾はするかも」（巻十七・三九三二）といい、「万代と心は解けて我背子が拊つみし手見つつ忍びかねつも」（巻十七・三九四〇）といい、相手が自分を思ってくれない、片思いの悲しさが歌われている。十二首の最後の歌に、

松の花花数にしも我背子が思へらくにもとな咲きつつ（巻十七・三九四二）

とあり、見所のない松の花の一つにも思ってくれない相手に対して、自分を卑下しつつ、それでも自分は家持を慕っている心情を示している。家持をめぐる華やかな女性たちに対しての自分の在り方を示しているあたり、家持の心を打ったのではなかろうか。それで十二首をまとめて載せるとき、最後に置いたのだと思う。

さらに、大神女郎については、その伝記は明らかではないが、大神は大三輪氏で、大神朝臣奥守や壬申の乱の時、奮戦した大神朝臣高市麿と同族らしい。家持に贈った歌は二首あるが、返歌はない。とくに、

霍公鳥鳴きし登時（すなわち）君が家に行けと追ひしは至りけむかも（巻八・一五〇五）

愛する家持のもとに、ほととぎすをつかって自分の切に思う心をうちあけて、あなたはどうですかとたずねているあたり、こまやかな心情が溢れている歌と思う。

中臣女郎は家持に、五首の求意の歌を贈っているが、うち三首は

序詞を用い、残りの二首は枕詞を用いた、いかにも万葉集末期らしい歌である。その中でも、

をみなへし佐紀沢に生ふる花勝見かつても知らぬ恋もするかも（巻四・六七五）

は三句までが「かつて」を言うための序詞。かつても知らぬ恋と家持を思慕する心がすなおに歌われている点、先にあげた大神女郎や平群氏女郎と同様、つつましやかな恋の告白が感じられる。

また、阿部女郎は家持よりは中臣朝人東人と関係があったらしく見え、大伴家持に贈った歌は集中に見えないが、家持が安倍女郎に贈った歌は一首だけある。

大伴宿弥家持、安倍女郎に贈れる歌一首

今造る久邇の京に秋の夜の長きに独宿るが苦しさ（巻八・一六三一）

笠女郎も家持をめぐる女性の一人で、巻三に三首、巻四に廿四首、巻八に二首と合計二九首が記載されており、いずれも家持に贈った歌である。しかし、返歌は二首しかない。笠女郎の歌の中には、

相念はぬ人を思ふは大寺の餓鬼の後に額づく如し（巻四・六〇八）

のように、万葉集中の名歌として人口に膾炙している歌もあるし、

陸奥の真野の草原遠けども面影にして見ゆとふものを（巻三・三九六）

の歌は、明治二十二年、森鷗外らが訳詩集を出すにあたって、詩集の題名を「於母影」と付けたが、その出典は、笠女郎の右の歌であることを同年八月号の「国民之友」で述べている。この歌は陸奥の真野の草原のような遠い所でさえも面影に見えるといいますのに、こんな近くにいてお目にかかれないというのは悲しいことですと、家持を思慕して暮すういういしさが感じられる。

最後に、大伴坂上郎女と、その娘大伴坂上大嬢についてであるが、大伴坂上郎女の歌は、短歌七七、長歌六、旋頭歌一、合計八四首あり、万葉集女流歌人の中で最も多作である。その中、家持に贈った歌は（巻六・九七九、巻十七・三九二七、三九二八、三九二九、三九三〇、巻十八・四〇八〇、四〇八一）の七首で、とくに巻十七の連作は大伴家持が越中国守として赴任するにあたり、贈った歌である。その歌の心は母の心であり、娘で、家持の正妻である大嬢の心中を思いやって詠んだものが多い。

坂上郎女の娘で、家持の正妻の坂上大嬢は巻四に十首・巻八に一首、合計十一首を家持に贈ったり、報えたりしているが、家持は実に多くの歌を情愛をこめて大嬢に贈っている。それに対し大嬢は、静かに答えている。例えば、家持は

夢の逢ひは苦しかりけり覚きてかき探れども手にも触れねば（巻四・七四一）

等の強烈な歌を贈るのに対して、大嬢は

吾が業なる早田の穂立造りたる蘊ぞ見つつ偲ばせ吾背（巻八・一六二四）

と早田の穂を送って、「私のことをいつも思い出して下さい。わが背よ」と優しい心根を託している。大嬢には母の坂上郎女のような才気はないが、順境ですくすく育った良さが歌に溢れていて、家持も正妻としてだけでなく、永遠の女性として心から愛していたようである。大嬢も、母の歌のような濃厚さや激しさはないが一首一首、心をこめて歌を作り、家持に贈ったものと思われる。

その他、家持と歌の贈答した女性たちはあるが、すべてを含め

て、これらの女性の歌はどの巻にあるかということを検討してみたいと思う。

二、その記載巻名

家持をめぐる女性たちの記載の巻を検討してみると、次表のようになる。

第一表　女性たちの歌の記載巻名

	氏名	3巻	4	6	8	11	12	13	17	18	19	計
1	山口女王		5		1							6
2	安倍女郎	1	4									5
3	紀女郎		7		5							12
4	平群氏女郎								12			12
5	大神女郎		1		1							2
6	中臣女郎		5									5
7	河内百枝娘子		2									2
8	巫部麻蘇娘子		2		2							4
9	粟田女郎子		2									2
10	日置長枝娘子				1							1
11	大伴坂上郎女	6	39	11	20				4	2	2	84
12	大伴坂上大嬢		10		1							11
13	笠女郎	3	24		2							29
14	童女		1									1
15	尼				1							1
	計	10	102	11	34				16	2	2	

以上から察すると、巻四が一〇二首で最も多く、巻八が三四首、巻十七が十六首とそれに次ぐ。更に巻六に十一首、巻三に十首、巻十八、十九にそれぞれ二首ずつある。巻三・四・六・八は古来から家持の撰といわれるところで、家持関係の歌が多く収められているのは当然のことであるし、巻十七、十八、十九は巻二十とともに家持の歌日記ともいわれるところであるから、家持をめぐる女性の歌が記載されているのもうなずける。わたしは女性の歌を一首ずつ、検討しているうちに次の点につきあたった。

本論

一、家持をめぐる女性の歌の表現上の特色

万葉調と古今調のかけはしとなったのは大伴家持であるということはよく聞くが、これは家持の歌が序詞や枕詞を用いて技巧的になったこと等をいっているようだ。わたしはその女性たちの歌の表現を検討しているうちに類歌や一・二句数似歌が予想外に多いのにはおどろいた。前述した家持をめぐる女性たちの歌の中で、一首もその種の歌を作らなかったのは、正妻の大伴坂上大嬢と大神女郎と、安倍女郎と河内百枝娘子、巫部麻蘇娘子、粟田女郎子、日置長枝娘

子、娘子、尼だけである。とくに家持の正妻、坂上大嬢は一首一首、心をこめて作り、贈ったのであろう。それが以心伝心、家持にも伝わり、大嬢を一層いとしく、熱情を傾けて大嬢を愛したともいえよう。

(一)　山口女王の場合

山口女王の家持に贈った六首中には類歌が二首ある。まず、山口女王の

A(ア)　剱太刀名の惜しけくも吾は無し君に逢はずて年の経ぬれば（巻四・六一六）

の類歌として、

(イ)　み空行く名の措しけくも吾は無し逢はぬ日数多く年の経ぬれば（巻十二・二八七九）

(ウ)　剱太刀名の惜しけくも吾はなし此の頃の間の恋の繁きに（巻十二・二九八四）

がある。(ア)と(ウ)は一句から三句まで全く同じであり、(ア)と(イ)は二・三句が同じで、四五句の歌想は全く同じである。いずれの歌も、「名の惜しいこともわたしはありません。あなたに逢わないで年が経ったので」という意味である。

同じく山口女王の歌で

B　(エ)　芦辺より満ちくる潮のいや益に念へか君が忘れかねつる（巻四・六一七）と

(オ)　湖回に満ちくる潮のいや益に恋はまされど忘れえぬかも（巻十二・三一五七）

も類歌といえよう。ともに、第五句が主想。二・三句は全く同じで四、五句もほぼ同じ歌である。(エ)と(オ)の第一句は、作者の親しく見ている景色をよみこんだものだし、ともに恋の苦しさを詠んだものである。なお、Aの(イ)は正述心緒の歌、(ウ)は寄物陳思の歌、(オ)は羇旅発思の歌で、いずれも巻十二の歌である。

(二)　紀女郎の場合

紀女郎の家持に贈った歌五首の中で、一・二句が他と類似している歌が二首ある。紀女郎の

C(カ)　神さぶと不欲にはあらずやや多く斯くして後に不楽しけむかも（巻四・七六二）

に対して、石川賀係女郎のそれである。

(キ)　神さぶといなにはあらず秋草の結びし紐を解く悲しも（巻八・一六一二）

(カ)(キ)を比較すると、ともに老残の姿を恥じる気持を歌いながら、今後とも愛して欲しいという願いもこめているが、(キ)の方が女性らしい情緒に溢れているようである。

次に、紀女郎の歌と巻十二所載の類似歌を記す。

D(ク)　玉の緒を沫緒に搓りて結べれば在りて後にも逢はざらめやも（巻四・七六三）

(ケ)　玉の緒を片緒に搓りて緒を弱み乱るる時に恋ひざらめやも（巻十二・三〇八一）

(ケ)の歌は寄物陳思の歌である。

(三)　平群氏女郎の場合

平群氏女郎の歌の中には、巻十二の寄物陳思の歌と一字一句も変らぬものがある。

E(コ)　隠沼の下ゆ恋ひあまり白波のいちじろく出でぬ人の知るべく（巻十七・三九三五）

(サ)　こもり沼の下ゆ恋ひ余り白浪のいちじろく出でぬ人の知るべく（巻十二・三〇二三）

また、一・二句類似の歌としては、前と同様巻十二の正述心緒の歌がある。

F(シ)　なかなかに死なば安けむ君が目を見ず久ならば術なかるべし（巻十七・三九三四）

(ス)　なかなかに死なば安けむ出づる日の入る別知らぬ吾し苦しも（巻十二・二九四〇）

(シ)は平群氏女郎の歌で、ともに訴えても顧みられない悲しい恋を詠んでいる。

(四)　中臣女郎の場合

中臣女郎の歌によく似た、巻十一の寄物陳思歌がある。

G(セ)　海の底奥を深めて吾が念へる君には逢はむ年は経ぬとも（巻四・六七六）

(ソ)　海の底沖を深めて生ふる藻の最も今こそ恋はすべなき（巻十一・二七八一）

内容的には少々違っていて、(セ)の中臣女郎の歌が、「例え、何年経った後でもお目にかかりたいものです」というのに対し、巻十一の方は、「今が最も、恋はすべないのだ」と遂げられない恋を歌っている。しかし、一・二句が全く同じで、恋を取り扱っているところに(セ)や(ソ)が先行して存在し、他が模倣したといいえよう。

(五)　笠女郎の場合

笠女郎の歌には他の巻に一・二句の類似句をもつ歌が二首ある。

H(タ)　うつせみの人目を繁み石走る間近き君に恋ひわたるかも（巻四・五九七）

よく似た歌として、

(チ)　うつせみの人目を繁み逢はずして年の経ぬれば生けりともなし（巻十二・三一〇七）

がある。巧みに一・二句を模倣して一首を構成した歌である。

また、笠女郎の次の歌は、巻三の余明軍の歌と一・二句を同じくしている。

I(ツ)　君に恋ひ甚も術なみ平山の小松が下に立ちて嘆くかも（巻四・五九三）

(テ)　君に恋ひいたもすべ無み芦鶴の哭のみし泣かゆ朝夕にして（巻三・四五六）

(ツ)の笠女郎の歌は、「あなたの恋しさに堪えかねて、平山の小松の下で嘆いていますよ」の意で、松の木の下で物思いに沈んでいるおとめの姿が浮かぶ。(テ)は、「天平三年辛未秋七月、大納言大伴卿の薨ぜし時の歌六首」のうちの二首中の歌で、左註に「右の五首は、資人余明軍が、犬馬の慕心に勝へず、感緒を申べて作れる歌」とあるので、以上から年代を推定すると、(テ)の方が古い歌であることが判る。

(六)　大伴坂上郎上の場合

大伴坂上郎女は万葉集の女流作家中、最も多作家であることは既に記したが、他の歌との類歌ならびに一・二句等類似歌も多く、前者は、三首あり、後者は五首に及ぶ。

まず、類歌から。最初の歌がいずれも坂上郎女のである。

J(ト)　佐保河の小石践み渡りぬばたまの黒馬の来る夜は年にもあらぬか（巻四・五二五）

(ナ)　川の瀬の石ふみ渡りぬばたまの黒の馬の来る夜は常にあらぬ

かも（巻十三・三三一三）

K(ニ)　千鳥鳴く佐保の河瀬のさざれ浪止む時も無し吾が恋ふらくは（巻四・五二六）

(ヌ)　阿胡の海の荒磯の上のさざれ浪吾が恋ふらくは息ふ時もなし（巻十三・三二四四）

L(ネ)　吾背子に恋ふれば苦し暇あらば拾ひて行かむ恋忘れ貝（巻六・九六四）

(ノ)　暇あらば拾ひに行かむ住吉の岸に寄るとふ恋忘れ貝（巻七・一一四七）

右の(ノ)の歌は巻七の雑歌で「摂津にて作れる」歌の中の一首である。もちろん、作者未詳の歌であるが、この歌は中古になって、恋忘れ貝をよんだ歌として、人口に膾炙した。

なお、坂上郎女には古歌を本歌どりにしたと思われる長歌がある。次の歌がそれである。

M(イ)　冬十一月大伴坂上郎女、帥の家を発し道に上りて筑紫国宗形郡名兒山を超ゆる時作れる歌

大汝　少彦名の神こそは　名づけ始めけめ　名のみを　名兒山と負ひて　吾が恋の千重の一重も　慰めなくに（巻六・九六三）

この長歌は、L(ノ)の短歌とともに、太宰府の任満ちて京に帰還する兄旅人に従って帰る途中の旅の歌である。M(イ)が本歌取りした歌は次の歌である。

M(ヒ)　大穴牟遅少御神の作らしし妹背の山は見らくしよしも（巻七・一二四七）

(フ)　名草山言にしありけり吾が恋ふる千重の一重も慰めなくに（巻七・一二一三）

右の歌は左註によれば、(ヒ)は柿本朝臣人麿歌集の歌、また(フ)は古歌集の歌である。

他に一・二句の類似句を持つのは次の歌である。

N(ヘ)　今は吾は死なむよ吾背生けりとも吾に縁るべしと言ふといはなくに（巻四・六八四）

(ホ)　今は吾は死なむよわが夫恋すれば一夜一日も安けくもなし（巻十二・二九三六）

O(マ)　真玉つく彼此かねて言はいへど逢ひて後こそ悔にはありと言へ（巻四・六七四）

(ミ)　真玉つく遠近かねて結びつるわが下紐の解くる日あらめや（巻十二・二九七三）

P(ム)　ほととぎすいたくな鳴きそ独りいてのねらえぬに聞けば苦しも（巻八・一四八四）

(メ)　霍公鳥いたくな鳴きそ汝が声を五月の玉にあひ貫くまでに（巻八・一四六五）

右のうち(ヘ)(マ)(ム)は大伴坂上郎女の歌、(ホ)は巻十二の正述心緒、(ミ)は寄物陳思の歌である。また、(メ)は藤原夫人の夏雑歌である。藤原夫人は大和高市大原にいたのでは大原大刀自とも呼ばれた人で、天武天皇の夫人となり、新田部皇子の御母にあたる。天皇崩御後、藤原不比等に嫁し、藤原麻呂を生んだ。歌中の「五月の玉」とは五月五日の節句に飾る薬玉をさす。

(ム)(メ)の場合、「ほととぎすいたくな鳴きそ」という発想はよくありそうだが、一・二句が、この形で初まっているのは万葉集にはこの二首しかない。大伴坂上郎女が藤原夫人の歌の二句を実感を訴えるものとして、ちよっと借用したと考えるのも、あながち、こじつ

けではないと思う。

以上、家持をめぐる女性たちの歌とその類歌、または女性たちの歌と、一・二句類似歌を考察してきたが、以上を通して考えられることはおしなべて、巻十一・巻十二との類歌ないし類似歌が多いことである。

第二表　作者別類歌と一二句類似歌表

	氏名	作者不明類歌	作者判明一二句類似歌	作者不明一二句類似歌
1	山口女王	3 巻12(3)		
2	紀女郎		1 巻8(1)	1 巻12(1)
3	平群氏女郎		1 巻6(1)	2 巻12(2)
4	中臣女郎			1 巻11(1)
5	坂上郎女	5 巻13(2) 巻7(3)	1 巻8(1)	2 巻12(2)
6	笠女郎	1 巻11(1)	1 巻3(1)	1 巻12(1)
13		2		2

第三表　巻別類歌と一二句類似歌表

万葉巻名	作者不明類歌	作者判明一二句類似歌	作者不明一二句類似歌	計
3		1		1
6		1		1
8		2		2
11	1		1	2
12	3		5	8

結び　巻十一・十二の原形について

以上から、次のことを考察する。結論から先にいえば、巻十一と巻十二とは、家持のころに、当時の文化人の眼に触れるものであったのではないか。その編纂者については、家持自身の歌の裏付けからすると、家持という線が出てくるようであるが、今は触れまい。ただ、いえることは家持をめぐる女性たちの歌が、巻十一や巻十二の歌に類似しているものが多いことは何を意味するか。それは、当時、巻十一や巻十二の原形に近いものが人眼に触れていたためでないかと思う。

『万葉考』で巻一と巻二、巻十三と巻十四、巻十一と巻十二の六巻を万葉集の原形と見ているが、巻十一と巻十二も賀茂真渕の明察通り、早くから形をなしていたと思う。家持をめぐる女性たちはそれを誦んじいて、時にふれて、その一節を用いて、学のあるところを示しつつ、歌の贈答をしたのでないか。そのためか、才智溢れる女性や身分のある女性の歌に類歌ないし類似句が多いようだ。また、ひたすら、家持に愛された坂上大嬢は、余りぱっとした歌ではないが、心をこめて一首ずつを詠んでいる。坂上大嬢もこの原形を知らないのでないが、その心が純粋ゆえに、類歌などを用いることを受けつけなかったのではあるまいか。

家持の時代に巻十一と巻十二は、人々の眼に何らかの形で触れていたのではないかと思う。